

序

本書『統合失調症』は、日本統合失調症学会の監修による専門家向けの教科書です。数多くの書籍が刊行されるなか、岡崎祐土理事長の方針のもと、こうした大部の教科書を企画した背景には、統合失調症の生活と脳をめぐる近年の変化があります。

生活についての変化は、社会のなかでの統合失調症のあり方についてです。精神分裂病からの名称変更で代表されるように、当事者の希望にもとづいて社会のなかでの生活を支援することが回復の基本であるという認識が広がり、そのためのサービスが少しずつ実現してきています。専門家には、そうした方向性を促進する役割が今後ますます求められていくと考えられます。

脳についての変化は、神経科学・脳科学の進歩により病因・病態の解明が大幅に進んだことです。統合失調症の病態において重要な対人関係や自我機能を支える脳の仕組みが徐々に明らかになるとともに、背景にある分子の変化やさらにその原因についての手がかりがつかめるようになってきました。そうした新しい成果を多くの専門家が共有し、より画期的な治療の可能性を考えることが必要になってきています。

こうした幅広い分野における急速な進歩は、専門家であってもその全体像を見通すことが難しいものです。総合的な理解をすすめるうえで基本となる知見を、1冊の書籍にまとめて手近に参照できるようにしておきたいという願いが、こうした教科書という形になりました。

75にのぼる章について、各分野で活躍しておられる第一人者の先生に、確かな知見をまとめていただけるようお願いしました。実践の現場における実感とのバランスをとりつつ、エビデンスの形で確かな知見を明らかにし、専門家としてのコンセンサスを提示していただきました。とくに第2部では、その要点を各章の冒頭に「Facts」として示していただきました。その点がこの書籍の大きな特徴になっています。日々の仕事でお忙しいなか、充実した原稿をお書きいただき、場合によっては編者からの要望にもとづいて修正に応じ、本書の完成にご貢献くださった執筆者の先生方に、深くお礼を申し上げます。

本書の企画が始まったのは3年前でした。最終の編集会議を第6回日本統合失調症学会に合わせて2011年3月に福島で予定していた2週間前に、東日本大震災が起きました。支援を優先させて会議や作業を遅らせたのは当然でしたが、もっとも逡巡したのは東北地域の先生方への原稿依頼でした。迷いつつお願いした原稿を無理を押しして完成してくださった、被災地の先生方や支援に関わられた先生方に、格別のお礼を申し上げたいと思います。

7月に延期して札幌で開催された学会は、福島で予定されていたプログラムがほとんど変更されることなく行われました。どなたも口にはされませんが、それぞれの方が最優先で

スケジュールをやりくりされたのだらうと思います。現地での支援だけでなく、そうした形のささやかな支援の輪が統合失調症の関係者のなかに広がったことを、記しておきたいと思います。

教科書は、その内容が統合失調症の当事者や支援者に向けたサービスに役立つことを、最終的な目標としています。専門家向けの書籍であっても誰もが容易に入手できる時代ですので、読者として専門家ばかりでなく当事者やご家族や一般市民を考えることが求められるようになってきています。教科書は、専門家だけで作りあげるものではないはずです。

こうした考えから、冒頭の第2章の執筆を当事者や家族や行政の方、また家族と専門家の立場をともに経験した方にお願ひし、さらに当事者やご家族へ病気の説明をする際の参考となる資料も付け加えました。専門家向けの教科書としては異例かもしれませんが、今後こうした構成が常識になっていくのだらうと考えています。さらに、こうした方々に編集の段階から加わっていただくことが、次の取り組みとなっていくと思います。

この第2章に執筆していただいた原稿には、それぞれの方が人生を賭けた想いがこめられています。その一部をご紹介させていただきます。「当事者は体験だけ語ってればいいという風潮には辟易としている。当事者の立場だからこそ言える問題提起や価値観があるはずだ」(Ⅰ. 統合失調症患者から)、「統合失調症の回復と再発防止で最も大切なのは環境である。家族全体を診る医療を行って欲しい」(Ⅱ. 統合失調症の母親をもって)、「どの分野の職種においても共通して必要な要素が患者に真摯に向き合うこと、あくまでも、その人のありのままの気持ちに寄り添う姿勢である」(Ⅳ. 災害の現場から見えた統合失調症の保健・医療・福祉のあるべき姿)、「当事者であっても家族であっても、その人がその人の手で人生を選ぶことのできる社会になることを、心から願う」(Ⅴ. 家族と精神科医の双方の立場を経験して)。

本書の紹介の最後として、ご家族の言葉をもう1つご紹介します。専門家を励ますこうした言葉に当事者やご家族がどのような想いをこめられているのかを、読者の多くである専門家の皆さんと繰り返し考えていきたいと願っています。

「回復が難しいと言われる統合失調症になったとしても、当事者も家族も『より良く生きたい』と願っている。精神科医療は、患者であるその人自身とその複数の家族の人生を左右する重要な医療である。人間にとって一番重要な医療だという誇りを持って、治療・研究にあたっていただけることを切に願う」(Ⅲ. 統合失調症になってもだいじょうぶな社会を願って)

2013年春

編者一同